

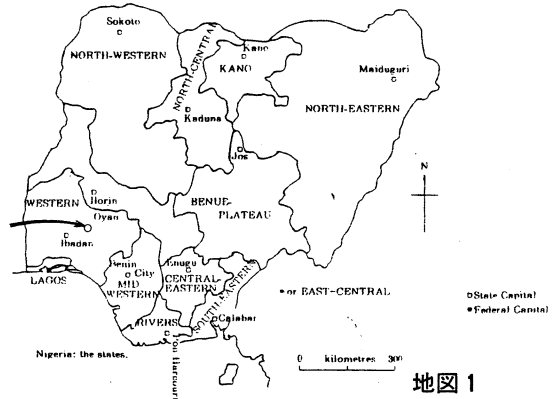
ヨルバにおける舞踊

— オヤンのオグン祭りを事例として —

遠藤保子

目次

- I オヤンの自然と社会
 - オヤンの自然
 - オヤンの社会
- II オヤンの生活と祭り
 - 人々の日常生活
 - オヤンの神と祭り
- III オグン祭りの実態と考察
 - 祭りの概要
 - 祭りの内容
 - 祭りの仮面
 - 祭りの音楽
 - 祭りの舞踊
- IV おわりに



地図1

畜、ブッシュ・ミートの狩猟、マホガニーの製材等があげられる。

オヤンの社会

<オヤンの社会>

オモトン王によると“オヤン”の名称は、15・6世紀頃(推定)、1代目の王エペEpeがある事を腹のすく程熱中して話したため、O-yan-nu(腹がへって困る)と命名されたことに由来している。前出のインタビューでは、このエペは、オドゥドゥワ Oduduwa(ヨルバの父)の息子の一人で、イレ・イフェ Ile-Ife(ヨルバ発祥の地)から現在のオヤンに辿りついた。しかしその頃、オヤンには先住民アグバAgbaがいて、両者は町の統治者の位置をめぐる戦いを交えることになった。だが、これは互角の戦いで勝負はひきわけになったが、アグバは司祭になる事を条件に王座をエペに譲り、エペが1代目の王になった。現在オヤンで最も大きな祭りであるアグバ祭りでは、この互角の戦いを記念して、現在の王とアグバ司祭の対決の演技^{*3}がみられる。

<オヤンの政治>

伝統的には王が、政治、裁判、祭礼に対して最高の権限があり、その下位に首長^{*4}や秘密結社オ

I オヤンの自然と社会

オヤンの自然

オヤンは、ナイジェリアの南西部に位置するヨルバ族のひとつの町で、オヨ州Oyo、オド・オティン地方自治体Odo-Otin管轄区にある。人口4,500人(1963年国勢調査)。

海抜およそ200メートル。季節は、雨期(3月~10月)乾期(11月~2月)に大別できるが、11月~12月にかけてハマターンというサハラ砂漠から砂が飛んでくる現象がみられる。年間雨量は40~50インチ。最低気温は雨期の20℃、最高気温は乾期の40℃にも達する^{*1}(地図1)

現在の24代目オモトソ王Omotosoに対するインタビューによる^{*2}と、オヤンの植生は、約100年前までは、熱帯雨林だったが、焼畑農業によって、サヴァンナへ変化してきている。

生業は主にヤムイモ、キャッサバ、トウモロコシ等の農業があげられるが、その他羊や山羊の牧

* 1 オヤンに関する統計資料はないため、Iloje, P.; A New geography of Nigeria, London Metricated Edition 1965 p. 47~51を参考にした。ただし気温は筆者が調べたものである。

* 2 この対話は、1981年11月、オヤンの宮殿において数回にわたって行った。王は推定年齢60才、イレイフェにあるカレッジを卒業。英語はもちろんラテン語も理解するインテリである。

* 3 宮殿を出発した王の軍団と神社を出発したアグバ司祭の軍団が途中で合流し、王と司祭が両腕をLの形に開いて回旋をし、すばやく回った方が勝つ。詳しくは、筆者; ヨルバのアグバ祭, 季刊民族学27, 1984新春, p. 82~89.

* 4 首長にはシニア、ジュニア、パレスの3種類がある。

グボニ Ogboni や将軍の結社オロバ Oloba^{*5} などがある。彼らは王を助けながら町の政治や裁判に携っている。人々にとって王は、神聖化された存在で、町の運命を司る第一人者でもあるといわれている^{*6}が、王の権限はオヤンの町内にとどまっている。

このような伝統的な政治構造が残されている一方、今日では、地方自治体や政府官轄の裁判所といった近代的な政治機関も併存するという二重構造がみられる。

II オヤンの生活と祭り

人々の日常生活

日常生活の実態を知るために、任意に選んだオヤンコミュニティハイスクール^{*7}の生徒50人を対象に、家族の一週間の生活時間帯を調査した(1982年4月1日～21日予備調査も含む)。この調査表の中から、ハイスクールのアデゴケ Adegoke

校長に典型的と思われる農夫^{*8}の生活サンプルの抽出を依頼した。(表1)

これによると農夫は、5時に起床、8時から12時～14時にかけて畑で働き、仕事が済んでからは、昼食、ゲーム^{*9}友人訪問をし、21時～21時半に就寝している。

人々の生活にとって舞踊は重要な要素であるという報告^{*10}があるが、本調査では日常の生活のレベルで舞踊が重要であるということは明らかにならなかった。

しかし舞踊は、祭りなど、いわゆるハレとケの考え方によれば、ハレの場において重要性をおびて存在している。

オヤンの神と祭り

ヨルバには、鉄の神または戦いの神オグン Ogun、雷の神シャンゴ Shango、神託の神イファ Ifa 等数百以上もの神々がいるとされている^{*11}。表2に示すとおり、オヤンの神及びその祭りの全体像をつ

表1 生活時間帯

氏名 Simeon Popoola (男)
年齢 推定45才
職業 農業 (キリスト教者)

	6:00	12:00	18:00	
月	睡眠	畑仕事	昼食、ゲーム、友人訪問	夕食、祈り、睡眠
火	祈り、朝の畑	畑仕事	シヤク、昼食、昼寝	友人訪問、夕食のだんらん
水	祈り、朝の畑	畑仕事	シヤク、昼食、昼寝	友人訪問、夕食のだんらん
木	祈り、朝の畑	畑仕事	シヤク、昼食、昼寝	友人訪問、夕食、祈り
金	祈り、朝の畑	畑仕事	シヤク、昼食、ゲーム	友人訪問、夕食
土	祈り、朝の畑	畑仕事	シヤク、昼食、ゲーム	友人訪問、夕食、祈り
日	祈り、朝食	教習、家路	昼寝	友人訪問、夕食

* ゲームや夕食のだんらんの時も踊られることはない。

- * 5 結社の性質上、詳しい説明は聞くことができなかった。
- * 6 1982年1月、首長エーサとのインタビュー。同じような王についての報告に渡部重行、ヨルバ族の王国季刊民族学26、1983秋、p. 23～31がある。
- * 7 西欧型教育がもちこまれたのは19世紀後半。教育制度はイギリスの影響を受けている。現在義務教育制はしかれていないが、小学校の就学率は1960年36%であったのが、1978年には62%に上昇している。参照、米山俊直他；アフリカハンドブック、講談社、1983、p. 166。
- * 8 オヤンの生業は農業が大部分をしめているので農夫の一例を示した。調査では、女性及び子供をも対象としたが、女性は仕事が済んでから、踊ったり歌ったりすることはなく、そのかわり昼寝やおしゃべりをして過ごす。子供は学校を終えると遊びと家の手伝いが多い。
- * 9 ゲームはアヨゲームが多く、6つづつ小さなくぼみがついている板と木の実を使って行うゲームだ。
- * 10 Awolalu J. O.; Yoruba Beliefs and Sacnficial Rites, Bristol great Britain Longman 1979, p. 105.
- * 11 Awolalu J. O.; ibid p. 20.
現地ではこの他キリスト教やイスラム教などの外来の宗教も信じられているが、ここではふれない。

表2 オヤンの祭礼(舞踊)カレンダー *12

季節	月	祭 礼	神	生 業
乾期	1	—	—	—
	2	オバタラ Obatala	創造の神	
雨期	3	エシュ Eshu シャング Shango エグングン Egungun	境界の神, トリックスター 雷の神 先祖崇拝(仮面祭り)	— — — — — — — — — —
	4	—	—	
	5	オグン Ogun	鉄の神, 戦の戦	
	6	オリッシャオコ Orisha Oko	農業の神	— — — — — — — — — —
	7	イレエ Iree オグンアディバ Ogun Adiba	イケノ(近くの町)の神 鉄の神	
	8	—	—	
	9	コンコトオリッシャ ウエ Konkoto Orisha Ewe	若人の神	
	10	オティン Otin	川の神	*キャッサバ等は、いつでも栽培でき、その9か月後に収穫が可能である。
	11	オサイイン Osanyin	医者(近くの町)の神	
	12	オシュン Oshun	川の女神	
1	オセ Oya	川の女神		
2	アグバ Agba	オヤンの町の神, 丘の神		
乾期	3	イファ Ifa	神託の神	— — — — — — — — — —
	4	エリンレ Erinle	川の女神	
5	—	—	—	
6	—	—	—	

かむために祭礼カレンダーを作成した。これらの祭りでは、舞踊が重要な要素となっており、従って表2は、祭礼カレンダーであると同時に舞踊カレンダーとも考えられる。このカレンダーで注目されることは、まず年間に祭りが多く、しかもそれは雨期に集中し、月別では、9月に最も多く行われている。だが、これらの祭りの期日は固定的ではなく、イスラム教の行事と重ならないように調節したり、信者の様々な都合で延期されたり流動的である。

さて、このような祭りの場の事例として、ここではオグン祭りの実態をみることにしたい。

III オグンOgun祭りの実態と考察

祭りの概要

<祭りの時期>

祭りは、例年5月、17日間に渡って繰り広げられる。しかし1982年は信者の都合*14で6月29日～7月15日に渡って行われた。

<祭りの場所>

信者の家から司祭オルオデOluodeの家を経由して、町はずれの神社、オヤンの宮殿、オウオデOwode市場で祝われた。

<祭りの目的>

オグン神は、鉄の神または戦いの神で、鉄に何らかの関係がある人、例えば狩人*15鍛冶屋(近代化が浸透しつつある今日では、自動車の運転手も)によって崇拝されているが、オヤンの信者の

*12 1982年1月、オモトソ王及グラマースクールエベドゥン教諭とのインタビュー。また祭りの他に舞踊は、人生の節目、例えば新生児の命名式、結婚式、葬式など、通過儀礼の一環としても踊られている。今日のなものとして、新しく学校を建てる資金を集めるためのチャリティーショーとか、学会会の催しにも踊られ、アングリカンチャーチなどの日曜サービスでも踊られている。

*13 ヤマイモ等についてはI. C. Onwueme; The Tropical Tuber Crops Yams, Cassava, Sweet Potato, Cocoyams, Ile-Ife John Wiley & Sons 1978に詳しい。

*14 その理由は不明である。

*15 ブッシュ・ミートや豹等を狩猟。筆者も狩猟の実態を観察しようとオルオデに申し出たが、女性は危険という理由で観察できなかった。

大半は狩人で占められている。

＜オグン神の神話＞

オルオデによる^{*16}と、オグンは神になる以前は、オドゥドゥワの息子で偉大な力を持った戦士だった。彼は、敵と戦っていた父を助けるほどの力があり、他界してから神になったという。オルオデからはこれ以上の詳しい説明は得られなかったが、別の神話では、神々がはじめて地球におりてきて、道もない雑木林に迷いこんだ時、オグン神だけが木々を切り倒し、道をつくることができた。それ以来多くの神々から偉大な力を有する神と思われ始めた^{*17}という記述もある。

＜御神体と神社＞

オヤンのオグン神の御神体は鉄や刀であり、神社は町はずれの神聖な木 (peregun) の下に建てられているとされる。

＜祭りの形式＞

オグン祭りはヨルバのどの町でも同じように祝われているのではない。

例えば、アキンリンソラ Akinrinsola^{*18} が報告しているオンドー Ondo の町のオグン祭りやイビグバミアミ Ibigbami^{*19} によるイレ・エキティ Ire-Ekiti の町のオグン祭りは、人々が祭りに積極的に参加し、時には、観衆と踊り手の区別がなくなる程一体化することがある。

しかし、それぞれの祭りの期日も、始まり方も、踊り方も異なっている。

例えばオグン祭りが盛大に行われるオンドーの町の司祭の踊りは”頭をたれ、肩をふるわせたり、ぐいと後方や前方へ動かす。又、腰をひねったりもする”^{*20}と報告されているが、オヤンではみられなかった。

祭りの内容 — VTR収録 —

＜祭りの始まり＞

6月29日、祭りは司祭や信者達が町はずれの森の神社に集まり、祭りの無事を記念してオグン神

へ犠牲(犬)^{*21}を捧げることから始まる。外国人である筆者は、それに参加する許可を得られなかったが、オルオデによると1頭の犬の頸動脈を切り、出血多量で殺した後、火あぶりにするという。この日から12日間、夜毎、信者の家では盛大なヤシ酒やビール^{*22}等の酒もりが行なわれ、ヤムイモからできるイニャン(ねばりけの少ないモチ状のもの)など多くの料理がふるまわれる。

＜第1回 宮殿で行われた祭り＞

7月11日、午後3時から4時にかけて宮殿で大がかりな祭りが開かれた。3時少し前、オルオデの家に集まった30人程の男性信者(40才以上^{*23})、数人の女性信者(35才以上)及び15人の男児信者(そのうち7人は1メートルの長さの鉄砲をかついでいる)が、10人以上のドゥンドゥン dundun (トーキング・ドラム)奏者を先頭に宮殿までゆっくりと歩いていった。その間、楽師はきめられた祭りのリズムパターンを演奏し、子供達は思い思いに空に向けて鉄砲を打ち鳴らしていた。

服装は、信者の数人が、日常着の上にオグン神の服とされているヤシの葉^{*24}を肩から腰へ斜めにたすきがけをしている他は、信者のほとんどが、青や黄色の様々な色をした日常着アバタ(上着)、ブバ(シャツ)、ソコト(ズボン)を身につけていて、祭りに特有な化粧や衣装^{*25}はみられなかった。また司祭のオルオデが、茶色の背広に青と白のしま模様のシャツとズボンを着けていたのは注目にあたいするが、なぜ洋服を着たのかは明らかではない。一方、宮殿では、この頃、宮殿の中心玄関に王、その両端に首長、召し使い等が椅子に坐って信者達を待ち構えていた。

オルオデの家を出発した信者達は、ゆっくりと歩きながら宮殿の門を抜け、30メートル程離れている宮殿へ進んでいった。(地図2,3)

王の前で腕立て伏せ状のあいさつをすませた信者達は、王の前の両側に4～5メートルの間隔をあけ、縦長の舞台空間をつくりながら地面に腰を

* 16 1982年6月、オルオデの家でインタビュー。

* 17 Awolalu J.; ibid p. 31.

* 18 Akinrinsola F.; Ogun Festival in Nigeria Magazine No. 85, June 1965, p. 85~95.

* 19 Ibigbami R. I.; Ogun Festival in Ire-Ekiti in Nigeria Magazine vol. 126-7, 1978, p. 44~59.

* 20 Akinrinsola F.; ibid p. 88.

* 21 オグン神の犠牲としては犬の他、ヤシ酒、ヤシ油等がある。(Awolalu J.; ibid p. 33)

* 22 これは西洋のビールで数多くの種類がある。

* 23 これは推定年齢である。今日においても病院で分娩しない人が多く、出生届けは、子供が就学する時になって始めて、彼らは宮殿に行き、生年月日を届け、王が受理している。年もそうだが、月日にいたっては、真びょう性に乏しい。

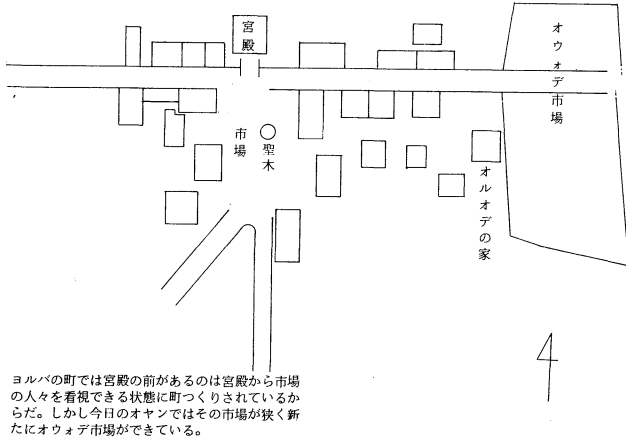
* 24 Idowu E. B., Olódumare God in Yoruba Belief London Longman 1962, p. 86.

* 25 オンドーの町のオグン祭りでは、信者が戦士の服装をしたり顔に化粧をした。(Akinrinsola F.; Ogun Festival in Nigeria Magazine No. 85, June 1965, p. 86) オグン司祭の化粧法として体半分を明るい色、赤、あとの半分を暗い色、黒に染める(フォラ・アジャイ、遠藤保子; 身体とリズムのコミュニケーション、世界の国シリーズ、エジプト・アフリカ、講談社、1983, p. 141) 等が報告されている。

おろし始めた。この間も絶え間なく太鼓が演奏され、鉄砲がうち鳴らされている。この舞台空間で、まずオルオデが立ち上がり、器用なフットワークを中心とする踊りを始めた。オルオデが踊っている途中から、他の信者も踊り出し、それぞれが思い思いの方向を向き、あまり場所の移動をせずフットワークを行った。その後、時々信者や観客による同じような舞踊をはさんで、オルオデのオリ

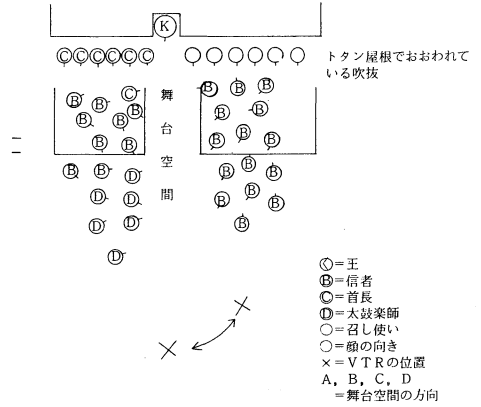
キ Oriki, 再び様々な信者による舞踊が踊られた。(表3)オリキとは、直訳すると“ほめたたえる名”のことだが、詩の形に似ているのでウェルチ Welch^{*26}は“ほめたたえる詩”ともいっている。

オリキや踊りの合い間に信者が王から贈られたヤシ酒を飲みだし、また雑談もまじり、始まっておよそ1時間後、第1回の祭りは終了した。その後4日間^{*27}は信者の家で夜毎酒盛りが行われる。



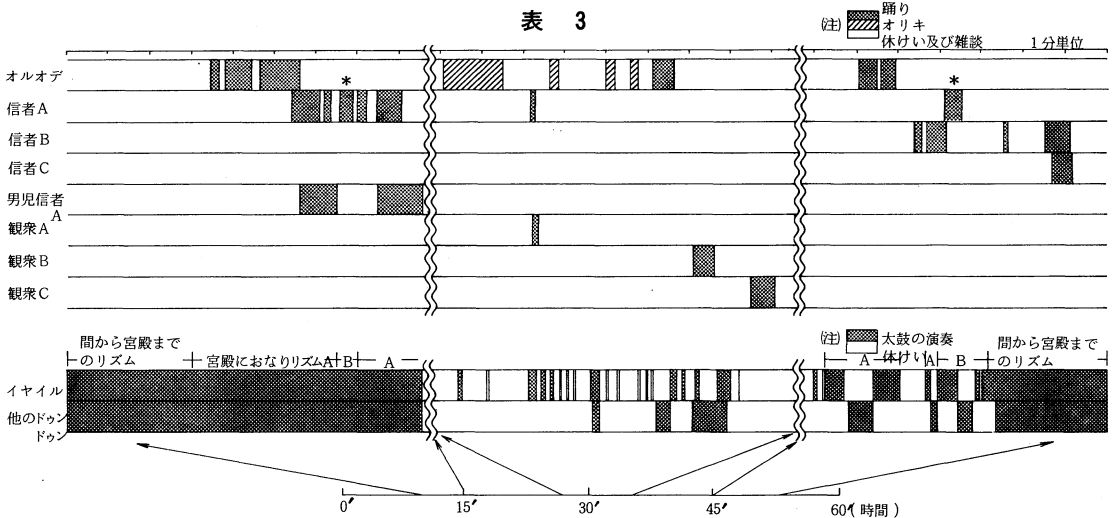
ヨルバの町では宮殿の前があるのは宮殿から市場の人々を看視できる状態に町づくりされているからだ。しかし今日のおヤンではその市場が狭く新たにオウオデ市場ができています。

地図2



地図3

表3



○ 信者Aの米印；リズムパターンはB。フット・ワークはみられず、両腕のあげおろしと肩の上下運動が主である。
 ○ その他の踊りはほとんどが両腕を上げ上半身に影響なく器用な足さばき=フット・ワークが主である。
 ○ また踊り手の身体の向きは様にて舞踊の軌跡も一定していない。
 ○ オルオデのオリキは身体を王正面にし、地べたにすわって唱えられた。

*26 Welch D, Ritual intonation of Yoruba Praise-Poetry (Oriki) in Yearbook of the Council vol. 5, 1973, p. 156~163.

オルオデのオリキは以下の通りである。(抜粋)

ヨルバ語

Oluode ngbadura fun kabiyesi wipe ki ade ope lori ki bata pe lese aseyi sawodun.

Oluode ngbadura fun kabiyesi wipe odun yi asen e sawo asan esomo.

訳；筆者

オルオデは、王の長寿と幸福を祈願する。

この祭りでは王は多くのお金と子供を得るであろう。

*27 4日間の間隔は固定的。市場が4日ごとに開かれていることと関係があると指摘できる。

＜第2回 宮殿及びオウォデ市場で行われた祭り＞

7月15日、午前10時頃。第1回と同じように信者達が、オルオデの家から宮殿へやってくるのだが、この日は狩人の仮面ライエユが登場する日でエグングンオジュ Egungun Ojeともいわれている。祭りの参加者や宮殿での王、首長等の位置、フット・ワークを中心とした踊りやオリキ等による祭りの内容は、ほぼ前回と同じであるが、異なっている点は、男児者が鉄砲を持っていないこと、ライエユ仮面が、王の前を様々な方向へ小走りしたり回転をすることである。(表4)

こうして40分後、信者達は宮殿から200メートル離れているオウォデ市場へ練り歩いていった。市場にいる人々が、たとえオグン神を信仰していても、オグンの信者に賽銭をあげると御利益があると信じられている。

ライエユ仮面も含めて信者達は、踊っては休み、休んでは踊って、賽銭をもらい、市がひける午後1～2時、信者達が家へ帰ることで祭りが終了した。

(種類は不明)の上に20～30センチの高さの人や動物の黒い木彫及び35センチぐらいの動物の白い角が交互に6～7つけてあり、この平たい板のへりには、サルや豹からはいだ原色のままの毛皮が10枚以上ついている。仮面をつけると、毛皮が膝下までたれ下がり、仮面をつけた人の身体をすっぽりおおう格好になる。これは仮面というより仮装というべきかもしれない。また仮面をつけるのは男性に限られている。

ライエユ仮面は5キログラム以上はある重いもので、祭りでは、しばしば仮面をとりはずす場面がみられた。^{*28}この仮面は毎年使用され、ふだんはエグングン(先祖崇拜又は仮面舞踊祭り)の司祭の所に保管され、オグン祭りでは、仮面は、エグングン司祭もしくはオルオデの家でつけられる。ヨルバにおいて、宗教に関する舞踊では、仮面を使うことは極端に少ない。理由は、仮面を作る材料の木に精霊が宿っていて、その木を切ると精霊が殺されてしまうから、もうひとつの理由は、仮面をかぶると踊り手の健康が害されるからといわれている^{*29}が、これはまだ定説ではない。

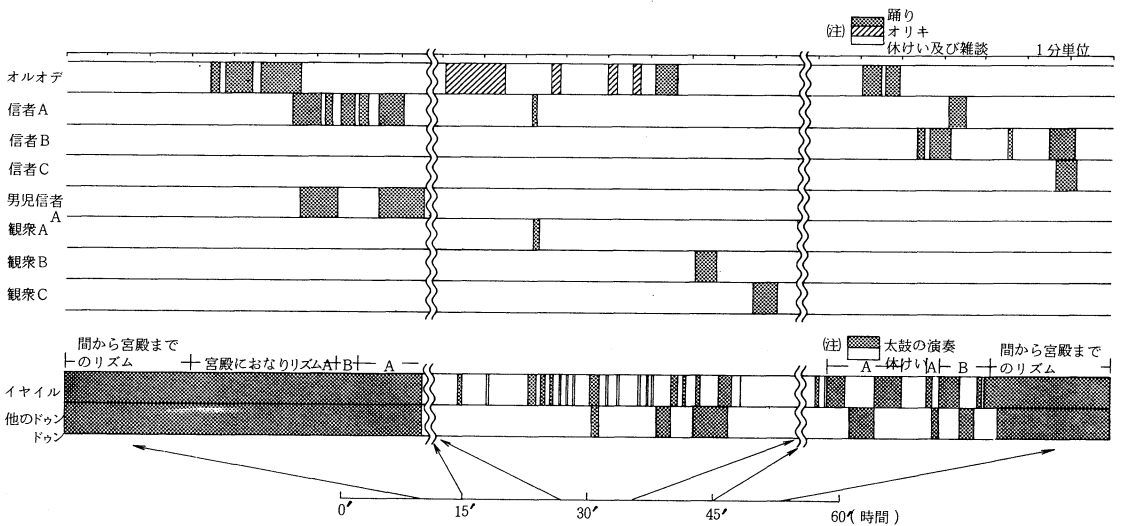
祭りの仮面

ライエユ仮面は、直径35センチの丸い平たい板

祭りの音楽

祭りで使われたドゥンドン^{*30}は、ヨルバで最

表 4



○ 信者Aの米印；リズムパターンはB。フット・ワークはみられず、両腕のあげおろしと肩の上下運動が主である。
 ○ その他の踊りはほとんどが両腕を上げ上半身に影響なく器用な足さばき＝フット・ワークが主である。
 ○ また踊り手の身体の向きは様にてあり舞踊の軌跡も一定していない。
 ○ オルオデのオリキは身体を王正面にし、地べたにすわって唱えられた。

*28 仮面をとりはずした踊り手の服装は青と白のたてじまのシャツと半ズボン。それに黄色のハイソックスをはき、膝の所に赤い布ひもが結びつけられていた。
 *29 フォラ・アジャイ、遠藤保子；身体とリズムのコミュニケーション、世界の国シリーズ、エジプト・アフリカ、講談社、1983、p.141。
 *30 ヨルバの楽器については、Darius T.; A Descriptive Catalogue of Yoruba Musical Instruments, London University Microfilms International 1969に詳しい。

もよく使われている太鼓で、全長およそ50センチ、直径20センチ、砂時計型の木の両端に羊皮を張り、皮を張るための細い皮ひもが120本ぐらいついている太鼓である。(写真1)

ドゥンドゥンは、左肩から左腰の前で水平になるように下げ、右手にカギ状の桴をもって叩きながら、左手で太鼓の皮を張っているひもに圧力を加えることによって音のピッチ(音の高低)を変える。

原則的に太鼓は男性によって演奏される。ヨルバ語は、音の抑揚が異なるとその意味も違ってくる音調言語で、楽師はヨルバ語にあわせ、ピッチをかえ、リズムをかえることによって太鼓ことばを話すことができる。^{*31}

オグン祭りでは、10人以上の楽師の中で、1人だけが太鼓ことばを演奏する(太鼓ことばを演奏する太鼓はイヤイルという)。残りの楽師は、ドゥンドゥンの中央についている調べ緒(120本の細い皮ひも)をしめ、音のピッチを一定させ、リズムの違いだけを演奏している。オグン祭りには決まったリズムパターンがある。(表5)

オグン祭りに限らず、その他の祭りにおいてもそれぞれのリズムパターンが決まっていて、人々はそのリズムを聞いただけで、何の祭りがかわかる。これとは対照的に舞踊には祭りごとの決められたステップはない。



写真1

表5 オグン祭りのリズムパターン

1 門から宮殿までのリズム

= 192

パターン1 $\frac{2}{4}$

パターン2 $\frac{2}{4}$

パターン3 $\frac{2}{4}$

パターン4 $\frac{2}{4}$

2 宮殿におけるリズム(A)

= 192

パターン1 $\frac{2}{4}$

パターン2 $\frac{2}{4}$

パターン3 $\frac{2}{4}$

パターン4 $\frac{2}{4}$

3 宮殿におけるリズム(B)

= 144

パターン1

パターン2

パターン3

採譜協力: 野田宏人

* イヤイルのリズムは太鼓ことばを話す時もあるのでリズムは一定していない。フレーズはこのパターンの反復であるが最初の小節は途中から始める可能性がある。

祭りの舞踊^{*32}

宮殿で繰り広げられた舞踊は、宮殿について最初と最後の部分に集約して踊られていた。

踊り手の多くが30秒を単位として踊り、その軌跡は一定せず、それぞれの踊り手が縦横無尽に動いていた。また1人の踊り手が踊り出すと他の踊り手がいっしょに踊り出すこともあるが、踊り手どおしが、ステップをいっしょに合わせるといったように互いを意識することはなく、無作為に踊られていた。

踊り手の姿勢は、上半身を少し前屈させ、腰を後ろに突き出し、膝を少し前へ曲げるのが典型的で、身体全体をまっすぐに伸ばすことはめったにない。(写真2)

それらの舞踊は、複雑でしかもスピードの速いフット・ワークが主である。また戦の動作に由来しているとされる鉄砲が使用されているにもかかわらず、踊りの中に戦いを表わす具体的な動作は

* 31 ヨルバ語と太鼓のリズム、ピッチがどの程度対応しているのか、今のところはっきりしていない。

* 32 舞踊をことばの上からみるとjoは舞踊を意味し、場所の移動をとめないながら一定の動作パターンを反復する時に用いられる。これに対してmiというボディ・ムーブメントを表わす語がある。これは、身体を上下に振動させながら左右に揺れる動作を意味している(フォラ・アジャイ・遠藤保子; ibid p. 133)。しかしmiをjoにくみ入れる人といれない人がいて、いまだ舞踊の用語に関して統一的理解がでない。

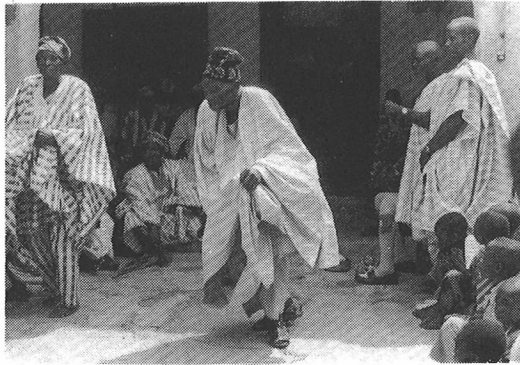


写真2

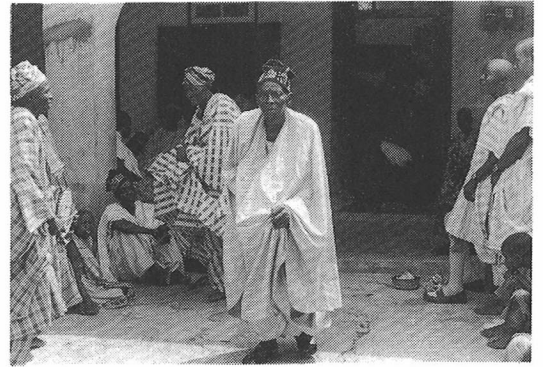


写真3

みられない。オグン神の神話との関連も今のところみられない。

随時踊られた踊りは、太鼓楽師が踊りの始まりのリズムを打つことによって、それまで地面に腰をおろしていた信者が踊り出すことが多く、踊り手と太鼓楽師が面と向かう場面があった。(写真3)これは、踊り手と楽師が合いづちや返答のいない会話をしているようにみえた。

上述のように観察したオグン祭りでは舞踊が重要な要素のひとつであることがわかった。

そこで舞踊の背景を知るために、ダンスチェックリストを用いて、オルオデにインタビューした。(表6)これによると、オグン祭りの舞踊は、動作に特別な意味はなく、舞踊の作者、所有者もいない。またその習得法は、17日毎に信者の家に集まり、年長の信者から、若い信者が見よう見まね

で覚えていく。踊り手の年齢、人数に制限はないが、本来は男性によってのみ踊られていた。しかし、今日、実際には女性信者も踊っている。

よい舞踊、よい踊り手の規準はともに速いフット・ワークがあげられている。

オグン祭りの舞踊の核は、すでに述べてきたようにフット・ワークにある。

日本の芸能、例えば「鹿踊り」や「鬼剣舞」でも、足を踏むという動作がその舞踊の核と考えられよう^{*33}が、その足の踏み方は異なり、オヤンでは、まるでタップ・ダンスのようにつま先や踵を複雑に動かし、日本のように、大地を踏みしめることはない。アジャイ^{*34}によればこのフット・ワークは、狩猟の動作と関係があるといわれているが、今のところどのような関わり方をもってゐるのかは不明である。またこのフット・ワークは、

表6 オグン祭りダンスチェックリスト(抜粋)

概観	時期、期間 場所 参加者	5月17日間にわたる(1982年は6月29日～7月15日に変更) 信者の家、オルオデの家、町はずれの神社・宮殿・市場 オグンの信者 およそ50人、時に観衆も混じる
舞踊の背景	目的又は機能 舞踊の意味 舞踊の分類 所有者 作者 習得法 特別名称 よい舞踊の規律	オグン祭りの一環として狩猟の安全や豊猟、交通安全を祈願 特になし 儀式的 なし 不明 17日間ごとに信者の家に集まり年長者から見よう見まねで覚える アグレ(本来は太鼓のリズムの叩き方につけられた名称) 速いフットワークができること
踊り手の背景	年齢・性別・人数 報酬 練習法 よい踊り手の規準	年齢・人数に制限なし、本来は男性のみ 観衆からお金、王からヤシ酒、ビール 舞踊の習得法と同じ 複雑なフット・ワークができること

* 33 松本千代栄他、舞踊の比較研究-舞樂を中心として- 日本女子体育連盟紀要、1969、p. 5～16.

* 34 1982年4月、イフェ大学にてのインタビュー。

足と身体他の部分（胴体や上肢等）とは独立して動き、ひとつの身体の中で運動の中心がひとつ以上あるという多中心性^{*35}の動きが特性としてあげられる。アジャイ^{*36}は、多中心性の動きを生んだ背景として、ヨルバの労働形態との結びつきをあげているが、まだそれは推論でしかありえず、今後の研究に待たねばならない。

イドウは、多くのヨルバの舞踊は、宗教的なうかれ騒ぎを除いて、固定化されたパターンがあって正確に行われている^{*37}と述べ、またアウォラルも Ilawe-Ekiti の舞踊に一定の型を示すと記している^{*38}が、オグン祭りの舞踊の場合、フット・ワークを固定化させたパターン、もしくは一定の型ととれば同じ事がいえる（しかし、フット・ワーク自体の足の動かし方は、踊り手によってかなり異なる。^{*39}）

この舞踊は、動作自体にバントマイムのような明示的側面がないかわり、フット・ワークを反復していく過程で何かを表出し、象徴していく結果をもたらすと思われる。観察した祭りの音と観衆と踊りの全体的な場の中で、フット・ワークを反復し続けた踊りの表情が忘我の状態になったことから、これらは推測された。

仮りにこのフット・ワークの反復がケからハレの世界へ移行する媒体といえるなら、ここに舞踊のもつ原初的な意味のひとつが見い出せるのではないだろうか。

Ⅵ おわりに

オヤンの祭りの舞踊にも近代化の波がおしよせ、踊り手の服装やオグン神の信者に今日的変化があらわれ始めている。

しかし舞踊は、人々の生活にまだまだ密接に結びついていて、原始心性を内包しつつ、人々に欠かせないものとして存在している。

今回の報告は、オヤンの町のひとつの祭りを通して舞踊を検討してきたが、ヨルバ全体における舞踊、ひいては無文字社会における舞踊の本質を論究する一里程と考えた。

舞踊現象の詳細な分析と象徴性、太鼓のリズムと舞踊との関わり合い等、まだ十分な分析、考察ができなかった点も多い。

しかしここで触れた舞踊の実態は、目に見えない無形の感情を肉体生命力のイメージに結晶化するという、人間と舞踊の始源の形態を現存していると認められ、舞踊の本質への探究心をかきたてるものであった。

今後、より詳細な検討を続けたい。

付記 フィールド・ワークを可能にして下さった
講談社・野間アジア・アフリカ奨学金関係各位、
及、研究論文の詳細な指導をして下さった
人間文化研究科（博士課程）の担当教官、松
本千代栄教授に感謝の意を表します。

* 35 多中心性という言葉は、Günther H., Grundphänomene und grundbegriffe des afrikanischen und afro-amerikanischen Tanzes, graz universal edition 1969でいわれ始め、この本の中では、アフリカの舞踊の特性として多中心性をあげている。また Kealiinohomoku J., A comparative study of Dance as a Constellation of Motor Behaviors Among African and United States Negroes in CORD 1976, p. 17~pp. 166でもアフリカとアメリカの黒人の舞踊を比較、検討している。

* 36 フォラ・アジャイ・遠藤保子；ibid p. 134~135.

* 37 Idowu E.; ibid p. 115.

* 38 Awolalu J.; ibid p. 107.

* 39 祭り後、収録した VTR を見ながらオヤンの人々にインタビューした。彼らにとって右足、左足と交互に動いていれば同じ動作の反復であるという彼らの概念が得られた。その際、はじめにつま先がつこうが踵がつこうが問題にされなかった。